埼玉県　令和3年度 英語教育改善プラン推進事業

取組：埼玉県小・中・高等学校等英語教育強化事業

当該地域の特性等を踏まえた課題分析の視点

埼玉県は、ア　教師の英語力、イ　生徒の英語力、ウ　学習到達目標の設定、公表の状況、到達度の把握　が課題である。
ア：英検準1級の取得率の高い自治体から聞き取った結果と比べ、県のけん引力の不足と学校への説明や周知が不十分である。
イ：英検等への公的補助の実施の有無など自治体間で差があることや、生徒自身の英語力向上の実感不足が要因である。
ウ：各学校の認識の差があり、設定や公表、活用の有用性について、県による周知徹底が十分でない。

Plan

■取組計画
小・中・高等学校の英語担当教師の指導力の向上
学習指導要領の理解と適切な指導・評価のための理論と実践
委託事業研修協力校による研究開発
中核教員対象事業に英検IBAを組み込み、中学校教諭の効果を実証
学習到達目標の設定・活用の有用性を実感できる事例提供

■体制
外部専門機関の講師を含む運営指導委員会による指導助言と支援
県教育局と市町村教育委員会による連絡調整と指導助言

Do

■小中学校等英語指導力養成講座
小学校教員120人、中学校教員80人を対象に３日間実施
新学習指導要領で求められる指導や評価についての講義・演習

■教育課程研究協議会
動画配信による行政説明、県内４地区より代表教諭が参加した研究協議動画の配信

■研修協力校による公開授業・研究協議
小・中学校８校、県内高等学校２校各地区の課題解決のための研究開発。研究授業・研究協議（オンライン・動画配信・紙面開催）

■ＩＣＴを活用した英語指導力養成講座
小学校教員17人、中学校教員21人が参加。中学校教員には英検IBAの受験を課し、講座受講による能力向上の検証を実施

■民間検定試験を活用した英語研修
高等学校教員約50名が３日間参加

■アクティブラーニング（協調学習）の研究・研修
東京大学と連携した生徒が主体的に学ぶ教材の開発や授業方法の研究

Check

■小学校
学習到達目標の設定（目標80%→80.5%）

■中学校
求められる英語力を有する英語担当教員の割合（目標40%→36.1%）
求められる英語力を有する生徒の割合（目標50%→46.8%）
学習到達目標の設定・公表・達成状況の把握（目標100%）
（設定：100%　公表：48.0%　達成状況の把握：75.3%）
生徒の授業における英語による言語活動時間の占める割合
（目標100%→1年81.9%　２年78.8%　３年77.5%）
パフォーマンステストの実施状況（目標S/Wともに年３回）
（S:4.4回　W:2.9回）
英語担当教師の授業における英語使用状況（目標100%）
（１年：93.5%　２年：93.6%　３年：93.3%）

Action

今年度の取組に加え、今日的な課題解決事業を立ち上げる

■小学校英語専科加配教員研修会（オンライン）
小学校英語専科教員を対象としたワークショップの実施

■小・中・高等学校教員合同ワークショップ
異校種における指導の実際に触れ、各学校段階で育成する児童生徒の姿を知り、自身の指導・教材開発に役立て、児童生徒の英語力の向上を目指す

成果の普及

■ 研修協力校が作成した指導案、学習到達目標等を掲載
（英語教材バンク【埼玉県教育委員会HP】）
https://www.pref.saitama.lg.jp/f2214/gaikokugokyoiku.html

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～上尾市立上平小学校～

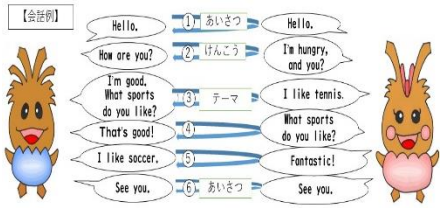
課題

・進んで自分の思いを伝えることに苦手意識をもっている児童（3～6年生合計）が約40%いる。（児童アンケートより）
・ねらいとした表現を習得できるが（知識及び技能）、目的・場面・状況に合わせて既習事項を活用して会話することが苦手な児童が多い。
⇒既習表現を活用して会話を続けることに慣れていないため、自信をもてていない。 ※『思考力、判断力、表現力等』の育成が課題

具体的な取組と工夫

○会話数系統表

言語の使用場面に合わせて、ねらいとする表現を身に付けさせるために、「ひとまとまりの会話」を通して習得させるようにした。既習事項を活用して会話数を系統的に増やしていけるよう、会話数を「往復数」を単位に表し、段階ごとに目安を定めた。



低学年	中学年	高学年
1～4往復	4～6往復	6～8往復

○Reaction&Connected Words系統表

相手との会話をつなげて、コミュニケーションを深めていけるよう、褒めたり、驚いたり、質問したりといったリアクション言葉に慣れ親しめるようにした。それぞれの表現をどの時期に扱うかを段階ごとに系統表にまとめた。

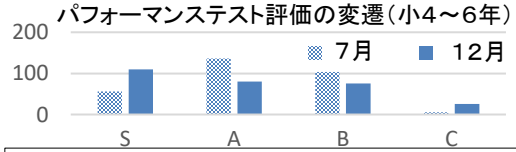
基本表現	段階	表現方法の積み重ね
対話の開始	低	Hello.（こんにちは）/ How are you?（調子どう？） / Hi.（元気？）
		I'm __ and you?（わたしは～あなたは？）
	中	What's up?（元気？） / Nice to meet you.（はじめまして）
	高	Excuse me.（失礼します） / Nice to see you.（またあえてうれしいです）
続け返し	低	____?（相手の返答をそのまま繰り返す）
	中	Really?（ほんとに？）
		Wow!（わお！） / Oh, no!（おお）
	高	You like ____?（相手の返答を文で繰り返す）
一言感想	低	Good.（いいね） / Nice.（ナイス） / Yes.（うん）
		O.K.（分かったよ）
	中	That's good.（いいね） / I see.（わかったよ） / That's nice.（いいね）
		Me too.（私も！）
	高	No way.（うそでしょ？） / No kidding.（まさか！）
		Good thinking!（いい考えだね！）
		I think so.（私もそう思います） / I don't think so.（私はそう思いません）
		Well.（えーと） / Really?（ほんとに？） / That's right.（そのとおり！）

○９年間を見通したCAN-DOリスト（教師用・児童用）

目標とする資質・能力を設定した「学習到達目標」を意識して授業を計画できるよう、学期ごと・領域ごとに、CAN-DOリスト（教師用：下図左）を作成した。また、義務教育段階の外国語に関する学びをつなげていけるよう、上平中学校と連携し、小1～中3までの9年間分をまとめた。さらに、児童自身が学習を振り返り、自己評価できるよう、CAN-DOリストを簡易化して単元ごとにまとめたCAN-DOリスト（児童用：下図右）を児童に配布した。

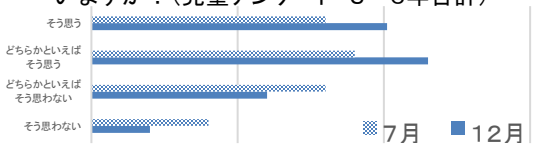
成果

パフォーマンステスト評価の変遷（小4～6年）



S評価（目的・場面・状況に合わせて既習事項を活用して会話できる）の人数が**増加！**

Q英語を使って、進んで自分の思いを伝えられていますか？（児童アンケート　3～6年合計）



肯定的回答の割合が59%→**73%**に上昇！

教師から見た変容

・言語活動の際に扱う会話量を増やしたことで、一定数の会話が続けられるようになり、その中で、自信をもって自分の思いを伝えられる児童が増えてきた。
・段階に合わせたリアクション言葉を毎時間1つずつ提示して慣れ親しませたことで、言語活動やパフォーマンステストにおいて、既習表現やリアクション言葉を進んで表現する児童が増えた。

課題及び改善案

課題

・成果（左）のグラフで示した「パフォーマンステスト評価の変遷」において、S評価は増えたものの、C評価も微増した。
・成果（右）のグラフで示したアンケート結果において、肯定的回答をした児童の割合は増えたものの、否定的回答をした児童がまだ約3割いた。

改善案

これらは、知識・技能の習得が不十分なまま、思考・判断・表現を重視する言語活動やパフォーマンステストを実施してしまったことが一因だと考えられる。よって、今後は、個に応じた指導を通して苦手な児童の底上げを図ること、既習事項をスパイラル的に指導できるよう授業を工夫することを念頭に置き、授業改善に努めていく。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～上尾市立上平中学校～

課題

フリートークする時間の確保が不十分なため、即興での対話や自分の思いを伝えることが苦手

具体的な取組と工夫

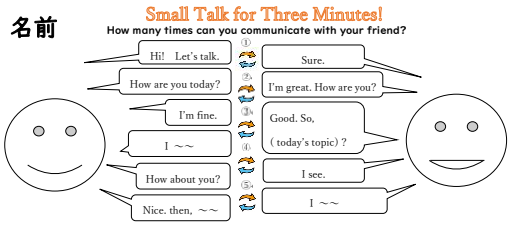
・Connected Words系統表の作成、取組　・Small Talk for Three Minutesのための会話数系統表作成、授業内での時間確保、取組

成果

Connected Words　I年生編　会話をスムーズにする英語　**名前**

＜その他＞

I agree with you.　賛成です。I disagree with you.　反対です。
I think so, too .　私もそう思います。I don't think so.　私はそう思いません。
Are you kidding me?　からかっているの？　No kidding!
No way!　うそでしょ！
★I feel sorry for you.　私はあなたを気の毒に思います。
I have already finished.　もう終わったよ。
Wait a minute.　ちょっと待って
I hope so.　そうだといいな。
I see. / I got it.　分かりました。
Pardon?　/　Sorry?　ん?なんだって?
Well…　ええと、、、



★connected words

★疑問詞（何を what　いつ when　なんで why　どのように how　だれが who

どっち which　何時に what time　どこで where　だれの whose　いくつ how many…）

をたくさん使っていこう!

目標とする往復数!

評価/学年	1st graders	2nd graders	3 graders
Excellent	over 8	over 9	over 10
Great	5 to 7	6 to 8	7 to 9
Good	less than 4	less than 5	less than 6

ちなみに、、、

小1-2	小3-4	小5-6
1～4往復	4～6往復	6～8往復

・Connected Wordsを授業内で積極的に活用したり、しようとする姿が見られるようになった。
・Small Talk for Three Minutesを繰り返し行うことで、疑問詞を用いた質問やConnected Wordsを用いて対話をつなげることができるようになった。
・他の活動の時も、Connected Wordsを用いる様子が見られた。
・授業で活用できる資料（Connected Words, English Lesson Style, Small Talk for Three Minutes等）の作成を行うことができた。

令和2年度・３年度上尾市立上平中学校生徒アンケート（12月実施）

当てはまる　４　　やや当てはまる　３　　あまり当てはまらない　２　　当てはまらない　１

評　価　内　容	R3					R2					R1				
	１学年	2学年	3学年	あおぞら	学校	１学年	2学年	3学年	あおぞら	学校	１学年	2学年	3学年	あおぞら	学校
授業ではじめに示される「課題」や「ねらい」を意識して、自ら考え主体的に授業に取り組もうとしていますか。	3.3	3.1	3.3	3.4	3.3	3.0	3.0	3.0	3.1	3.0	3.1	3.0	3.0	3.6	3.2
授業で、学級の仲間と話し合うなど協力して学習する中で、仲間の意見を聞いたり、自分の考えを伝えたりすることができていますか。	3.4	3.4	3.5	3.2	3.4	3.5	3.6	3.3	3.4	3.4	3.7	3.3	3.4	3.6	3.5

オレンジ色（現2年生）、水色（現3年生）

・授業内で、自ら考え主体的に授業に取り組もうとする生徒が多くなった。→ Small Talk for Three Minutes の成果

課題及び改善案

・難易度が上がったため、仲間の意見を聞いたり、自分の考えを伝えたりすることができている生徒の割合が下がったかと推測される。生徒の実態を把握した上で、自分の考えを伝えたり、表現したりする学習活動の工夫をする。
・区域の他の小学校とも連携をとることが必要である。
・今後、より小中学校の連携を図るため、児童生徒が使用する教科書の内容（構成、使用する表現等）に着目する必要がある。
・区域内での定期的な授業検討会を行っていく。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～川越市立月越小学校～

課題

県学力調査・全国学力調査の結果、学力が高く主体的に学ぶ児童は多いが、発表等、自己表現活動を苦手とする児童が多い。

↓

英語活動と英語環境を充実させた英語教育を通して、自己表現活動を楽しみ、英語好きな児童を育てていく。

具体的な取組と工夫

１　授業等における学習活動の工夫

（1）帯活動の継続（発音、英語の歌、Who am I?クイズ）
（2）Small Talkの取組
（3）Classroom English の共有と活用（英語で朝の会）
（4）連絡帳の英単語書き取り（5・6年生）
（5）ALTの意図的活用（英語ネイティブ発音矯正等）
（6）板書とスライドで学習の流れを提示
（7）スライドのフラッシュカードで英単語を反復練習
（8）既習内容を取り入れたジブリゲームの活用
（9）振り返りカードの共有（3～6年生）

２　英語環境の充実

（1）英語ルームの環境整備（英語のほめほめ言葉、絵本、単語カード棚）
（2）英語の歌動画の共有
（3）各学年の学習内容の掲示（3年生以上）
（4）校内の環境整備（教室内に月、曜日、天気英単語カードの掲示、階段に英単語表示、特別教室に英単語表示）
（5）職員集会の教員向けのEnglish Timeの取組
（6）ブロック別（低・中・高学年、特別支援学級）での授業公開
（7）教員の英語指導力向上のための校内研修

３　校種間等の連携

（1）初雁中学校との英語研修
（2）初雁中学校英語教員による外国語授業
（3）東京国際大学教授による英語研修
（4）初雁中学校とのオンラインによる英語授業の取組
（5）語学指導補助員の活用
（6）アメリカ現地校との国際交流（クリスマスカード交換）

成果

1　授業中の帯活動やフォニックスの取組、朝の会のEnglish Time、連絡帳での英単語の書き取り等、英語活動に多く触れることにより、日常の中で自然に英語を発する児童が増えた。フリートークにも慣れてきた。
2　授業の型を共有し、学習の流れをスライドで提示することにより、児童も教師も見通しを持って授業に取り組むことができた。
3　掲示物を工夫することにより、英語に興味を持つ児童が増えた。
4　ALTと意図的に関わることにより、コミュニケーションの達成感を味わうことができた。
5　アメリカ現地校との交流により、児童が楽しみながら英語を活用することができた。
6　教員向けのEnglish Timeの取組では、各学年の学習内容を共有したり、スリーヒントクイズ、対話の仕方等を練習したりしたことで、職員間の英語の授業に関する意識が高まった。

課題及び改善案

1　フリートークの話題を広げられるように、帯活動を継続し、更に自信を持って、英会話ができるようにする。
2　ネイティブスピーカーの発音に触れる機会を増やすために、地域の教育資源の活用を計画していく。
3　失敗を恐れず更に自己開示できるように、教師と児童、児童相互で英語で認め合う雰囲気作りを構築していく。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～川越市立初雁中学校～

課題

新学習指導要領の趣旨を体現するために、「４技能５領域をバランスよく育成する英語教育」が必要である。そのために、従来の指導方法の見直し、新しい教科書についてのより深い教材研究が求められる。また、小学校と中学校、それぞれの指導の特性を理解しつつ、発達段階や学習状況を踏まえた指導を行わなければならない。さらに、ＧＩＧＡスクール構想によって１人１台端末が導入されたことを生かし、学習者用デジタル教科書の活用方法を模索する良い機会である。

具体的な取組と工夫

◎　本校英語科の重点目標
①ＩＣＴを効果的に活用した授業の実践
②言語活動の充実を目指した授業改善の推進
③指導計画の作成と指導改善のための指導・評価サイクルの確立

○指導形態の工夫
本校の英語科教員の構成（５名）を生かし、第１・２学年の授業では全ての時間でティーム・ティーチング（T・T）とし、きめ細かな指導を行っている（週４時間中３時間を日本人教員同士のT・T、残りの１時間をAETとのT・T）。第３学年ではT・Tを実施していないが、担当教員（２名）それぞれの個性を生かしつつ、共通の教材を用いた綿密な打合せのもとに授業を展開している。

○定期的な英語部会の開催
時間割を調整し、毎週１回は英語部会を実施している。指導方法、評価方法等について話し合い、授業改善に生かしている。

○小・中学校合同研修の実施　　初雁中学校区４校夏季合同研修会
講師　東京国際大学言語コミュニケーション学部　松林　世志子　教授
演題　「小・中学校を通じた英語教育の強化」

○ＩＣＴを効果的に活用した指導方法の工夫の例
Google Documentの音声入力機能を用いた、発音・音読練習
Google Documentで作文練習、Google Formsを利用した小テスト
カメラの動画撮影を利用したスピーチの発表　等
※ICTを活用しない授業においても、各学年の実態に合わせて工夫した帯活動を通して、英語力の底上げを図っている。

○学習者用デジタル教科書の活用
文部科学省「学習者用デジタル教科書普及促進事業」により、本校の生徒は現在、外国語(英語)のデジタル教科書を全生徒が３学年分（３冊分）使用することができる。効果的な活用方法等について研究を進めている。

○GTECの活用（令和３年５月実施）
第１・２学年でGTEC Juniorを、第３学年でGTEC Coreを活用して、全生徒の４技能の力を測定し、分析した。結果は、全学年で全国平均を超えていた。課題はスピーキングにあることが分かった。

○小中学校との連携
英語科教員１名を校区内３校対象に兼務発令の申請をした。その３校を月１～２回訪問して小学校教員とのT・Tを行っている。指導方法の共通理解や、児童の実態把握を行っている（生徒指導推進事業とも兼ねている）。

成果

令和3年度埼玉県学力学習状況調査平均正答率
中学2年生
本校　62.1%　県 62.6%　学力の伸び率(前年度調査なし)
中学3年生
本校　61.2%　県 60.0%　学力の伸び率　78.0%
中学3年生GTECの結果から
CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒が41.1%いることが分かった。その後の授業の見取りや川越市中学生学力調査等の結果から、CEFR　A1レベル相当以上の英語力を有する生徒は50%を超えていると考えられる。

○GTECの結果分析を通して、生徒への指導方針を立てることができた。
○普段の授業の中で、4技能5領域をバランスよく育成する方法について、英語科教員が共有することができた。
○小学校の学習内容や指導方法について理解を深めることができた。
○小中連携の意義について再認識することができた。
○生徒が学習者用コンピュータの扱いに習熟し、学習効率が上がった。

課題及び改善案

① 小・中学校の連携をより強化していく必要がある。そのために、ICTも効果的に活用しながら、定期的に小・中合同の研修会を開催したり、小・中合同の授業研究会等を実施したりして、児童生徒の円滑な学びの接続ができるようにしていく。
② 学習者用デジタル教科書を使用することが目的化しないように、学習者用デジタル教科書の活用に適している場面を精選する必要がある。
③ 研究に充てる時間を十分に確保するために、教材研究等を協力して行う等の工夫が必要である。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～神川町立青柳小学校・神川中学校～

課題

■児童生徒は、自分の思いや考えを主体的に表現することが苦手。
■全国学テ・県学調で、英文の記述問題の正答率が低く、無解答の生徒もいた。
　⇒考えられる原因…自分の思いや考えを持ち、英語で伝える機会の不足と、それを実行する英語運用能力の不足。

具体的な取組と工夫

【研究主題】
自分の考えや思いを主体的に伝え合う児童生徒の育成　～Try out活動を通した思考力・判断力・表現力の向上を目指して～

【町内統一の授業での取組】
■Small TalkにTry outを導入
■小・中学校でSmall Talkの流れを統一
■Try outの要素をその他の活動にも導入
■小・中学校で中間指導の方法を共有

【授業以外での取組】
■６月～１２月に月一度の公開授業
■定期的な授業の録画と検証
■冬休みに模擬授業・指導案検討会
■太田洋教授とのzoom会議を４回

☆Try outとは☆
コミュニケーションを図る目的・場面・状況に応じて、児童生徒が伝えたい内容を、自分で既習事項の中から必要な英語表現を選んで（即興的に）やり取りする言語活動。
（東京家政大学　太田洋教授）

成果

【児童生徒】
■自分の気持ちや考えを英語で伝えられる技能が身についてきている。
■授業を楽しみ、主体的に学ぶことや、自分から英語でコミュニケーションを図ろうとする態度が育ってきている。
■既習事項を活用し、自分で英文を作る表現力が向上してきている。

【教員】
■Small Talkを楽しみ、児童生徒の実態に合った中間指導ができるようになってきている。
■「教え込む」ことよりも、児童生徒から良い点・悪い点を「引き出し」、共有することが増えてきた。

課題及び改善案

【課題】
■児童生徒…英語への苦手意識がある。
■教員…児童生徒・活動の見取りや中間指導が上手くいかないことがある。

【改善案】
■児童生徒の感じる負担感・抵抗感を減らす工夫を行う。
■見取り方の再検討。どのような場面で、どのような見取り方が適切か検証する。
■中間指導のみを録画で検証。褒めているか、指導内容が適切で偏っていないか等を確認する。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～八潮市立八條北小学校～

課題

▸外国語における児童の意識調査より、「聞くこと」「話すこと」は自信が持てるようになっているが、**「読むこと」「書くこと」に対して苦手意識が高くなっている。**それは、どこまでできるようになればよいのかという児童と教師のゴールが明確になっていないことが挙げられる。

➡ **・単元のゴールを見通した指導と評価の一体化を図る。**
・外国語をさらに活用できる環境を整備し、児童の活動を増やす。

具体的な取組と工夫

■八北スタイル（縦軸）

・インプットとアウトプットをつなげる授業展開
・意図的・計画的な中間指導

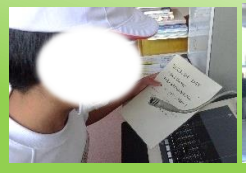
■八北モデル（横軸）

・ルーブリックとパフォーマンス評価
・文字指導の評価規準

積極的にコミュニケーションを図ることができる子

■ENGLISH DAY

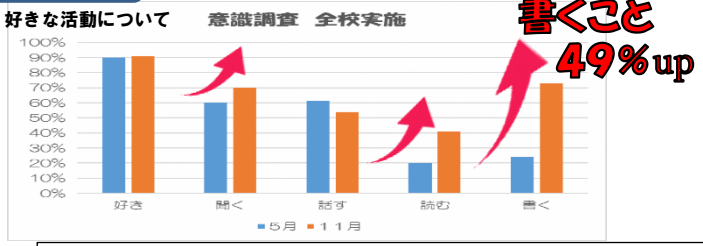
・外国語のあふれる生活
放送・あいさつetc…
・読み聞かせ（英語）
・ENGLISH TIME

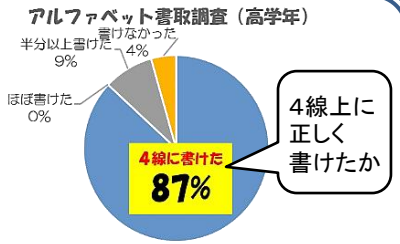


■E☆ロード

・やって楽しい、見て楽しい活用できる掲示物
・学年別のﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ

成果





英単語認識テスト（Let’s Tryより抜粋・全校調査）

動物	７７％	dog
食べ物	７９％	rice
色	８８％	orange

➡ **全校児童の8割が英単語習得**

課題及び改善案

■英語で活動するイベントを定期的に設け、楽しく英語を活用する機会を増やしていく。

■今までの教材教具を整理し直し、効率的に学習効果を高められる環境を整える。

■小中の連携を強化し、互いの課題を改善できるようにさらなる連携を図っていく。

課題

お互いの考えや気持ちについて英語でコミュニケーションできる生徒

▶埼玉県学力学習状況調査の結果から、本校の「外国語表現の能力」の平均正答率が県の平均正答率を大きく下回っている。
▶意識調査アンケートから、生徒は「英語を話すこと」を最も苦手としている。→間違いが怖い、自信がない。
▶埼玉県学力学習状況調査等の結果から「学力向上」が喫緊の課題であり、全教科において基礎基本の定着が必須である。

具体的な取組と工夫

■指導と評価の一体化

〇帯活動の充実
帯活動を充実させ、弱点強化や基礎基本の土台作り、４技能５領域の関連とバランスを意識した言語活動を行う。

〇インプットとアウトプットの接続
教科書本文や仲間の意見等をインプットさせ、インプットしたことを抽出、整理、統合させアウトプットさせる。

〇意図的・計画的な中間指導
場面や状況の確認、よい表現の共有、頻度の高いミスの修正、意見を深める助言等の中間指導を通してねらいにせまる。

■外国語を活用できる環境づくり

〇ICT機器の効果的な活用
言いたいのに言えない表現を調べる、意見交流を通して意見を深める、スピーチの動画を撮影し相互評価等で活用。

〇英語の掲示物の活用
ALTスペースの設置、新聞記事の活用、感染予防の呼びかけに英語のポスターを活用、職員室に英語で入室等。

成果

〇単元のまとまりを大切にし、指導と評価の一体化を図ることで、生徒が見通しを持って主体的に学習に取り組めるようになった。
〇「話したことを書く」など４技能５領域の関連やインプットとアウトプットの接続を図ることで、即興性や発信力強化につながった。
〇ICTを活用することで主体的・対話的で深い学びを実現し、生徒の基礎基本の定着と自信をつけることにつながった。

課題及び改善案

〇学力差や意欲の差が大きく、ICTをより効果的に活用する等して、個別最適な学習を実現させること。
〇学力差が大きい中で、すべての生徒に「即興性」と「やりとり」を育む授業展開の研究。